熊本保健科学大学
週刊 NEWSLETTER
2023.9.29
第 211号
発行 入試・広報課

# 子どもたちの言語発達見守る

「ことばの相談室」井﨑 基博准教授

地域の中で言語発達に障害がある子どもたちを支援している言語発達臨床教育研究室。中心メンバーの井﨑基博准教授＝顔写真、言語聴覚学専攻＝に研究室の活動内容や今後の展望などを寄せてもらいました。

写真左は、西里小教諭との交流会で質問に応じる井﨑准教授。同右は、「ことばの相談室」のパンフレット

## 地域が求める支援提案

言語発達臨床教育研究室（通称「ことばの相談室」）は、2018年4月に設置されました。言語発達障害に関する「臨床」、「研究」、「教育」を提供する施設として、言語聴覚学専攻の教員３人（井﨑、永友、松尾）を中心に活動しています。

研究室では、地域の言語発達に障害のある子どもを支援する活動を行っています。具体的には、言語発達に障害のある子どもに対する個別指導（１回あたり60分）、地域の保育園・幼稚園・小学校への巡回相談（２時間程度の保育や授業参観と、１時間程度の先生とのミーティング）、地域の小学校への学習ボランティアの派遣（ボランティアサークルの学生が主体）といった取り組みです。

また、言語発達障害のある子どもに対して先端の支援ができるような研究を進めています。臨床の現場においては、新しい指導法や巡回相談におけるコンサルテーション法の開発など、いま地域が求めている支援を提案しています。

一方、「教育」の分野では、在学生に対する臨床教育、４年次生に対する卒業研究指導、さらに卒後教育として卒業生の臨床業務に対する相談・アドバイス、学会での研究発表の支援などを行っています。

支援の必要な子どもに支援の手が届くように、もっと自由に活動できる言語聴覚士のモデルを作っていきたいです。言語聴覚士が、医療の枠を超えて、地域に開かれた存在になるようなアイデアと実行を心掛けています。

# そうだ、がん検診に行こう！

## キャンペーンCM 学内で撮影

10月は、「がん検診受診率向上集中キャンペーン月間」。「そうだ、がん検診に行こう」と呼びかける動画撮影が15日（金）、本学であり、医学検査学科４年の学生９人が撮影に臨みました。

動画は、がん検診受診啓発を目的に熊本県が制作するものです。15秒のキャンペーンCMは、全部で10パターンある中のひとつ。10月からCMとしてテレビやYouTube、都市バスモニター等で放映されます。

（入試・広報課）

カメラに向かって「そうだ、がん検診に行こう」と元気よく呼びかける学生たち

写真左は、壁飾りを製作するリーダー学生たち。同下は完成した壁飾りの前で団結を誓う研修参加者たち

アカデミックスキル支援センター

レポート

## 「アカデミックスキルⅡ」リーダー学生夏期研修

# 開講間近 共同作業通じ結束

１年次後期の全学必修科目「アカデミックスキルⅡ」開講を直前に控え、前期「アカデミックスキルⅠ」から授業支援で活躍するリーダー学生24人を対象とした夏季研修を19（火）～21日（木）の３日間、1500Ｍ講義室とアカデミックスキル支援センター学生指導員室で開きました。

「アカデミックスキルⅡ」はグループワークを積極的に取り入れているのが特徴で、リーダー学生にはグループ活動を円滑に進めてもらう役割が期待されています。夏期研修は、学修への意識づけやリーダー同士の結束の強化を目指しています。このため、協同して「何かをつくる」ことに多くの時間を割いており、今年も全員が協力して縦横180㌢の壁飾りを製作しました。

初日、学生たちは開始式後からメールマナーの確認やレポート作成の基本講座等の座学を受けた後、制作物について協議しました。全体スローガンを「結～つなぐ～」とし、ことばのイメージに合った壁飾りを発泡スチロールと布を使って製作することに決定。昨年の同研修を経験した学生指導員らの助言も入れながら、デザイン、材料買い出し、制作と、最終日まで全員が汗を流しました。

共同作業を終え、リーダー学生たちは「自分のことを人に知ってもらい、相手のことも知りながら、学科を問わずいろんな人と触れ合えたことが、何よりも楽しかったし、嬉しかったです」（理学療法学専攻）、「一人ひとりの意見やアイディアを受け入れて作り上げていく力が生かせた活動で、楽しく、達成感がありました」（看護学科）などと、表情を緩ませていました。

（入試・広報課）

# ボランティア学生、園児と交流

水上村で「あそび教室」

益満美寿准教授（健康・スポーツ教育研究センター）による「子どもたちに感覚運動あそび教室」が８月30日、９月５，20日の計３回、本学と地域包括協定を結んでいる水上村の湯山保育所と岩野保育所の２カ所で行われました。

学生たちの夏季休暇を利用したボランティア活動と小児発達分野教育の一環として企画されたもので、リハビリテーション学科理学療法学専攻と生活機能療法学専攻の２年次生計14人が参加。３日間で計31人の保育園児（３～５歳児）と交流しました。

学生たちは、「走る」、「投げる」、「跳ぶ」、「協調」等の面での発達を企図したプログラムにそって子どもたちと触れ合っていました。

保育士の先生方は、「小さな村では大学生を見かけないから、子どもたちは若いお姉ちゃんやお兄ちゃんと触れ合って大はしゃぎで喜んでいました。本当に有難いです」と話していました。一方、参加学生からは「日ごろ、小さな子どもと交流したり、遊んだりする機会がないので貴重な機会になった」「よい体験で、勉強になったし、何より子どもたちが可愛かったです」などと感想を口にしていました。

（入試・広報課）

保育園児たちと新聞紙を丸めて遊ぶ学生たち

## 普通救命講習会に参加して

看護学科１年　山中 菜愛さん

防災サポーターの学生、防災士の資格取得を目指す学生や防災サポーター学生を対象とした普通救命講習会が18日（月）、本学アリーナであり、本学をはじめ、熊本大、熊本県立大、崇城大の計82人が、AEDを使った救急救命法や応急処置などを学びました。参加者の一人で学生広報スタッフの山中菜愛さん（看護学科１年）に感想を寄せてもらいました。

消防署員の指導で心臓マッサージ法を学ぶ参加学生

### 周りの人の「正常」知ること重要

皆さんは周りの人の「正常」を知っていますか？

倒れている人を見たら胸骨圧迫、人口呼吸をする…。

口では簡単に言えるけれど、実際のところ、即座に応急手当ができる人はどれぐらいいるのでしょうか。私は、今回の普通救命講習で、周りの人の「異常」に気がつくことの重要性を知りました。

思い返してみると、小さい頃、朝起きた時の私の様子がおかしいと思った母が、病院に連れて行き、実は低血糖を起こしていたということがありました。これは母が私のことを普段からよく見ていて、その時の様子が「異常」だと思ったからできた行動だと思います。

このことを思い出した私は、救命も同じように「きつそうだな」「おかしいな」と、敏感に気がつくことが大事だと思いました。いくら胸骨圧迫や、人工呼吸の正しい方法を知っていてもいけないのだなと感じました。

今回の講習を受講して、救命に対する私の意識が大きく変わりました。みなさんも、普段から周りのことを知る意識を持ちましょう。あなたにしか救えない命があるはずです。（アカデミックスキル支援センター学生広報スタッフ）

## アルバム作り

私の秘話ヒストリー

リハビリテーション学科
理学療法学専攻
山本　良平講師

私の趣味のひとつにカメラがあり、日頃からパソコンの背景は自分で撮った写真を使っています。昨年、コロナ禍でできていなかった結婚式を挙げました。その準備で、式で使う動画用にと自分と妻のアルバムを実家から借りてきました。

久しぶりに開いてみると、覚えていない頃のものも含めて素敵な写真がたくさんありました。動画づくりを通してお互いの子どもの頃や家族のこと、知らなかったことを知るいいきっかけにもなったと思います。

昔は今のように写真を撮ってすぐに確認したり、加工したりできなかったのに、素敵な写真をたくさん撮ってアルバムにしてくれていたお互いの両親に感謝しています。今までは風景の写真ばかり撮っていましたが、これからは自分が家族の宝物になるような写真をたくさん撮ってアルバムにしたいです。

まずは妻との約束を守るため、半年前に行ったまま手つかずの新婚旅行のアルバム作りから始めようと思います。

【お断り】10月から、週刊NEWSLETTERは原則として月曜日の配信とします。なお、次号（212号）は10月10日（火）に配信する予定です。